

駒場廃棄物リポート

目次

1 . 廃棄物関連の歴史	p . 3
2 . 年間スケジュール	p . 6
3 . 現状報告	p . 7
3 - 1 基本的処理システム	
3 - 2 分別項目ごとの特徴	
3 - 3 場所ごとの特徴	
4 . 組織体制	p . 19

付録 各集積場に集まるごみの出所

付録 場所ごとのごみ回収頻度

はじめに

いままでも、廃棄物に関する調査はさまざまな主体が独自に行っていましたが、その結果として得られた情報が一つのものにまとめられることはありませんでした。そして、駒場キャンパスの廃棄物事情について詳しくまとめた資料集が存在しないことによって、関係者間での情報共有、業務の引継ぎ、および新しい対策の立案などが行いづらいうという現状が、駒場キャンパスにおける廃棄物問題の解決へむけての一つの大きな障害となっていました。この「駒場廃棄物リポート」はそのような現状の改善を目指し、駒場の廃棄物事情についての情報をさまざまな角度からまとめた資料集です。

なお、作成に際しては、本格的な調査は行わず、各関係者へのインタビュー、過去の調査結果の参照などを通じて、関連する情報を収集し、整理することに主眼を置きました。

1 . 廃棄物関連の歴史

1995年 廃棄物処理見直しのきっかけ

当時のごみ倉庫は、種類・規模・数などが20～30年前とほぼ同じ状態であり、近年の生活様式の変化に伴うごみ増加に対応できていなくて、常にパンク状態。ごみのあふれた倉庫・ごみ箱からカラスが散乱させており、構内一円が本当に汚い状況だった。そんな状況のもと、4号館のごみ倉庫で捨てられていた薬品が化学反応を起こし、ガスが発生する事件が起こり、これを1つのきっかけとして環境委員会でも廃棄物処理システムの改善を求める意見が出てくるようになった。ただ、このころは一般の学生が出す生活系廃棄物よりも実験系廃棄物の処理が主な関心を集めていたようだ。

1996年 屋外ごみ箱の撤去

この年、屋外に設置されていた金網のごみ箱約100個がほとんど全て撤去されるという、廃棄物処理に関わる大きな改革がなされた。その背景にあったのは、カラスがごみをつつくとか、雨でぬれると分別・回収が困難になるとか、学外の方がごみを捨てていくというような屋外ごみ箱に対する問題意識であった。また、この少し前に東京都が同様の理由で公園のごみ箱を撤去したことから、公共空間をきれいに保つために、あえて屋外にごみ箱を設置しないという考え方が一般に広まったことも、大きな理由となったようである。

このとき環境委員会では、環境整備を重視する賛成派と、学生にとっての利便性を重視する反対派に意見が分かれた。結局賛成派の意見がとおって屋外ごみ箱は全て撤去されたのだが、その後半年ほどはポイ捨てが増えて以前より汚くなってしまった。しかし、その後は徐々に改善されていき、現在ではポイ捨てされているごみは学生が多く集まるような学生会館・キャンパスプラザ周辺で目に付く程度であり、屋外ごみ箱の撤去によって明らかに構内はきれいになったと言える。(12・13号館中庭と正門横の林の中だけは、近くに建物がなく、どうしてもごみがポイ捨てされてしまうので、後でまた設置した。)

1997年 駒場祭エコプロジェクト開始

この年の五月祭で環境対策の5カ年計画(5年でごみの量を3分の2にする)がスタートし、学園祭においてようやくごみにも目が向けられてきた。そしてこの年の駒場祭からは、プロジェクト制といって、特定の分野について委員会と他団体とが協働でプロジェクトを企画・立案していくという試みが始まった。このような新しい流れの中で、環境三四郎と駒場祭実行委員会とが協力して環境対策を行っていく「ECO Project」が始まったのである。

Eco Projectの1年目の目標はごみ分別の徹底であったが、その後は廃棄物の適正処理だけにとどまらずリサイクルの推進・洗い皿の試みなど多様な環境対策を行うようになってきた。同時に、ごみの分別・責任をもった処理も各参加団体に浸透し、着実に改善されてきている。昔は1年間で最も構内が汚いといわれていた駒場祭後の時期も、今では1年間で最も

きれいな時期と言われるくらいになった。

1998年 ごみ箱のセット化開始

96年に屋外ごみ箱を撤去した後、屋内のごみ箱は3分別（可燃、不燃、ビン・カン）のものが1個ずつ10mほど離して置かれていたが、屋外ごみ箱同様に分別全くされていなかったためセット化することになった。このとき、初めはビン・カン用のごみ箱も可燃や不燃と同じくポリバケツを置いていたが、結局ほぼ分別されずに捨てられてしまっていた。ビン・カンに関しては回収業者の基準が特に厳しいため、ビン・カンのごみ箱は出来る限り分かりやすくしなければならないということになり、缶ビンのごみ箱は、丸い穴のあるふたつきのものを設置することになった。その結果、現在ではビン・カンへの他のごみの混入はほぼなくなった。

1999年 構内ガラス大掃除

この年に大掃除をするまで、構内のガラスを拭いたことは15年間以上なかったという。また、当時はオリエンテーション期を中心に学生が窓ガラスにまでビラを貼っており、テープの後などで相当汚かったようである。そこで、一度完璧にきれいにしてしまい、ビラを貼りにくいようにすることが必要と考えて、業者に依頼して構内の窓ガラスを全て拭いてもらった。その後、通常時において窓ガラスにビラが貼られることはほとんどなくなり、新歓期などにも委員会の働きかけでサークルが「貼ってはがせるテープ」を使うようになったため、窓ガラスはきれいなままである。

2000年 ごみ分別新ルール導入

この年、ごみ箱の分別が3分別（可燃・不燃・ビンカン）から5分別（可燃・不燃・ビン・カン・ペットボトル）に変更された。（ペットボトルに関しては、生協が2年前から販売を開始し、1年前から独自に店舗内・食堂の2箇所回収を開始していた。）この時、ごみ箱セット化の流れに従い、5つのごみ箱は全てセットで設置するようにされた。さらに、より分かりやすく、しっかりとしたごみ箱のセットを図書館などから設置していき、5年間で構内全部のごみ箱を統一する計画が立てられた。（そのごみ箱が設置されないところでは、ごみ箱の周辺に本郷と統一された分別表示ポスターが貼られている。）

ごみ倉庫の改修

当時、学生会館前にあるごみ倉庫が、学外者の不法投棄が絶えないなどの理由によって封鎖されてしまったため、学生会館やキャンパスプラザから出るごみがすべて9号館横のごみ倉庫に持ち込まれるようになり、倉庫がすぐにいっぱいになってしまう状態が続いていた。

スペースに余裕はあったものの、一気にごみが持ち込まれると、可燃・不燃などの区別なしに置いていく学生が増え、回収業者が回収拒否するようになってしまったのである。そこで、ブロックによって区分けされただけだった9号館横のごみ倉庫を改修し、大型物置のような屋根がついたものにした。その結果、倉庫のパンク状態が改善されると同時に、カラスによってごみが散乱されることもなくなった。その後は、構内の他のごみ倉庫も改修されてきている。

落ち葉の堆肥化実験開始

至る所に木立がある駒場キャンパスからは、毎年大量の落ち葉が見られる。その量たるや90ℓごみ袋にして約5000袋分、重さにして9トンとも言われているが、回収された大量の落ち葉は現在、すべて可燃ごみとして処理されている。以前は、回収された落ち葉は木立の中に穴を掘って埋めたり、一二郎池の中に廃棄したりしていたのだが、その処理方法ではキャンパスの景観が損なわれるとの意見が出て、数年前から全て可燃処理に回すようになったのである。その結果、可燃ごみの処理費用は大幅に増え、何より土に還るはずの落ち葉が燃やされてしまうようになった。そこで、この年のk-net懇談会において提案された「落ち葉堆肥化の実験」を環境三四郎メンバーが中心になって、学部の協力のもとで開始することとなった。この取り組みで作られた堆肥は、キャンパス内の植木に再び使われるだけでなく、駒場祭で無料配布されるなど、大学と地域の交流にも貢献している。また、この実験は現在も引き続き行われている。

2001年 生協が新型リサイクル弁当箱を導入

生協の駒場購買部は、平日昼休みに食堂前で（購買部とは別に）お弁当を販売している。多くの学生が昼食としてこの弁当を購入しており、販売数は毎日数百個にもなる。この弁当に使われている容器は、以前からPSPを使用しており、生協は以前から回収・再資源化を行ってきた。しかしそれまでの容器では、弁当を食べた学生が自分でその容器を水洗いしないと回収してもらえない仕組みで、実質的な回収率は非常に低かった。（2000年度で17%）

この年に導入された新型弁当箱は、フィルムで残飯と容器を分け、残飯は可燃ごみ、フィルムは不燃ごみ、容器と容器のふたはリサイクルボックスに入れる仕組みで、学生にとっても分かりやすい処理方法となった。その結果、2001年4月の回収率は50%、その後も30%程度となった。結局、2001年度の弁当容器回収率は25%であり、以前と比べて大幅な改善となった。

2. 年間スケジュール

4月 新歓期

4月初旬の諸手続きから始まるオリエンテーション期では、サークルの勧誘ビラが大量に配られたり、立て看板が数多く立ったりして、通常時とは景観が全く異なる。この時期だけは、オリエンテーション委員会が駒場キャンパスを管理するが、同委員会やオリエンテーション担当教官の考え方によって毎年対策の行われ方に違いがあるようだ。今までは、オリエンテーション委員会がはんこうを押した立て看板やビラのみを許可する制度にしたり、立て看板の規格を統一したりというような対策を行ってきた。

5月 全学環境週間

この環境週間の中には、一斉清掃とって、後期課程の学生や、院生、教職員が構内清掃や雑草取り等を行う日が設けられている。しかし、1、2年生はほとんど参加しない。また、環境整備とって、通常時には回収されない粗大ごみの回収日も設けられている。研究室から出る備品（机やイス等）が中心に回収される。あわせて、放置された立て看板の撤去・処理も行われる。

6月 季節は梅雨、そして夏に・・・

気温があがり始めるこのころから、飲料用PETボトルやビン・カンの排出量が増えてくる。また梅雨になって、学生が教室内で昼食をとるようになると、教室内へのごみのポイ捨てが増えてくる。

7月 夏学期期末試験

試験の時期が近づくと、ノートのコピーをしたり、試験対策用のプリントを作ったりする学生が増えるため、紙ごみの量が増える。特に、学生会館のげすぷりや、生協コピー機周辺に紙ごみが散乱している。

8月 夏休み

9月 秋休み

夏休み、秋休みの間には、学校にくる学生はサークル活動を行う人がほとんどであるから、サークルからでるごみが主となる。その量は通常時より明らかに少なく、清掃業者・回収業者もそれに合わせて回収頻度を減らしている。

10月 冬学期開始

11月 駒場祭

駒場祭期間は、立て看板が許可される。以前は、放置された立て看板や、散乱するごみが問題となっていたが、エコプロが開始されてから、ごみの状況は改善されている。

12月 環境整備（5月と同じ。）

1月 冬休み

2月 冬学期期末試験（夏学期と同じ）

3月 春休み

3 . 現状報告

3 - 1 基本的処理システム

外部から見た廃棄物排出主体としての駒場キャンパスは、1つの事業者として扱われる。そして、駒場から出るごみについては、経理課の用度掛というところが、全体を把握し、計画を書いたり、報告書を作ったりしている。

しかし、駒場内を見てみると、実質的に2つのごみ処理ルートがあることがわかる。経理課用度掛が直接把握しているものと、生協が管理しているものである。ここでは、前者を「学部ルート」、後者を「生協ルート」と呼ぶこととする。

3 - 1 - 1 学部ルート of 基本的処理システム

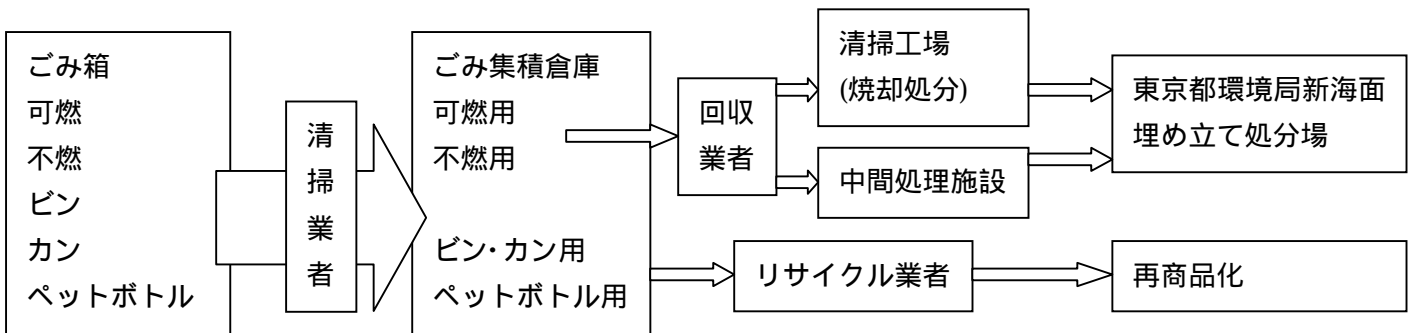


図3.1.1 学部ルートの廃棄物処理システム

ごみ箱に捨てられたごみは、清掃業者によって回収され、構内の集積所にいったん集められる。その後、可燃ごみ、不燃ごみは、1号館の裏や9号館の脇、2号館のそばなどにある倉庫に集められ、収集運搬業者によってごみ処理工場まで運ばれる。可燃ごみは東京都内の清掃工場に運ばれて焼却処分され、東京都新海面埋め立て処分場で埋め立て処分され、不燃ごみは東京都環境整備公社の城南島廃棄物処理施設で、粉碎、圧縮処理をして、可燃ごみ同様新海面の埋め立て処分場で埋め立て処分されている。

ビン・カン・ペットボトルは、倉庫に集められた後、生協が委託するリサイクル業者が生協ルートで出たビン・カン・ペットボトルと一緒に収集運搬する。そして、この業者が中間処理したものが、原料として製造業者の手に渡り、リサイクルされている。

構内の清掃を委託されている清掃業者では、現在、駒場キャンパス全域を約30名ほどで清掃している。どの建物、どの教室もほぼ毎日、一度は清掃をするという契約になっていて、一つの建物を一人から三人くらいで受け持つ計算になる。このメンバーのシフトやさまざまな問題に対処する主任が一人駒場に常駐している。

3 - 1 - 2 生協ルートの基本的回収システム

駒場キャンパスに設置されている生協のごみ箱は、購買部前・バーガーショップ前・パンショップ前の3箇所。これらのごみ箱に投棄された廃棄物のうち、燃やすごみは事業系一般廃棄物になり、それ以外は産業廃棄物となる。このうち、購買部前とバーガーショップ前・食堂のごみ箱に捨てられた、「燃やすごみ」「燃やさないごみ」は、大学とは別のルートで処理されていることが図から読み取れる。

次に、リサイクルの対象となっているものについては、缶・ビン・ペットボトル・弁当容器は

法令上「特定容器」に該当するので、再商品化が義務付けられている。

ビン・カン・ペットボトルは、大学の管理する集積倉庫に運ばれ、学部ルートで回収されたものと一緒に生協が契約した業者が収集・運搬している。このうち、缶は自動車製品や鉄骨など別製品の原材料となり、ピンは再びガラスピンに生まれ変わる。2001年の缶・ピンの回収率は75%になった。

飲料缶に代わって、現在急速に販売量が増えているのがペットボトルである。不燃ごみの容積を大きく増やしてしまうので、2000年度から大学全体でペットボトルの分別回収が始まった。リサイクル費用については、商品の価格に含まれる形で、仕入れ時に生協がメーカーに支払っている。

昼休みに食堂前で販売されている生協のお弁当容器も、回収されリサイクルされている。ポリスチレンペーパーという発泡スチロールでできたこの容器は、捨てられた後、容器製造会社によって引き取られ再び弁当容器になる。リサイクルされた弁当容器を再び生協が購入することで、資源循環が成り立っているといえることができるかもしれない。

その他、生協で使用された段ボールや古紙は100%回収され、再生紙の原料となっていることも特筆に値する。

このように、学内廃棄物のリサイクルの中には生協が担っているものも多い。

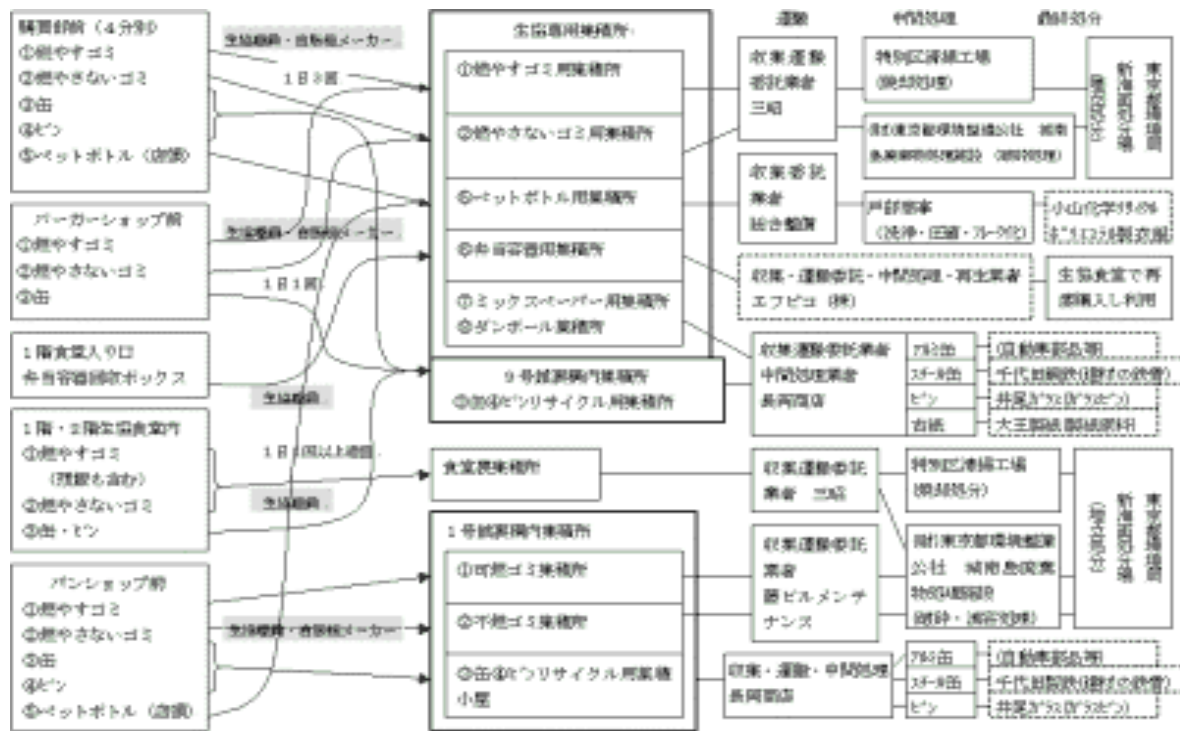


図3.1.2 生協ルートでの廃棄物処理システム

(現在、生協のごみ箱からでたごみは、すべて生協独自の集積場に集められている。)

3 - 2 各分別項目ごとの特徴

3 - 2 - 1 可燃ごみ

処理方法

焼却処理、その後埋め立て処分

対象となるごみ

紙類（「紙類」が分別項目にない場所において）

ティッシュ・紙コップ、割りばし、

残飯（容器包装類は基本的に不燃）、タオルなど。

よく混入するごみ

ビニール類・プラスチック類などの不燃物

リサイクルできる紙類（「紙類」が分別項目にある場所において）

組成比

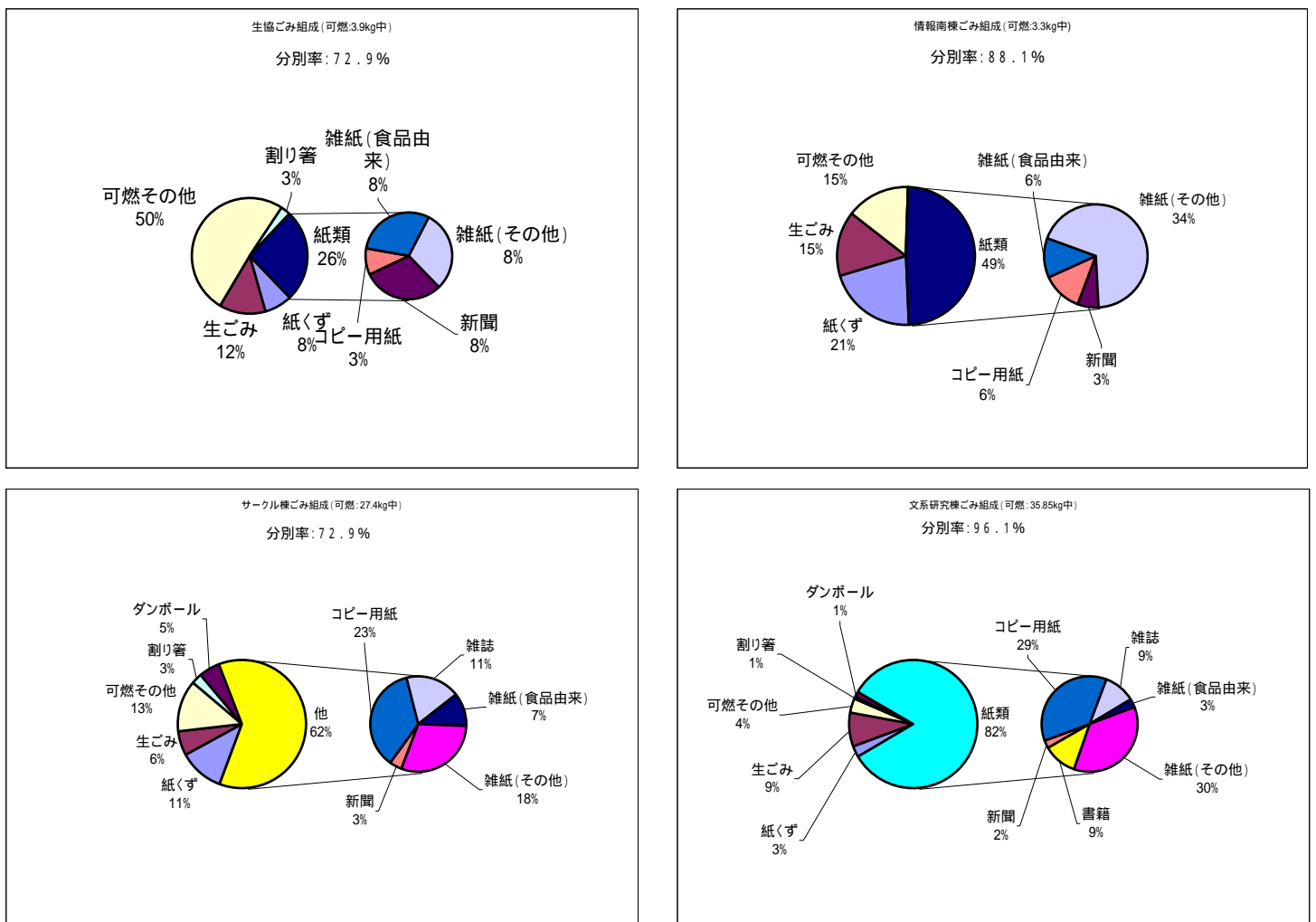


図 3 . 2 . 1 可燃ごみの組成比 (2000.10.18-24) 駒場環境定量調査より

可燃ごみは排出量が最も多い分別項目である。そして大きな問題は、最大シェアを占めるこの可燃ごみの分別が最もなされていないということである。可燃ごみ用のごみ箱は通常、最も分別率が低くなっているのである。主として2つの原因を挙げられる。一つは食品の容器包装類など、本来不燃ごみとなるべきものが多く混入していること、そしてもう一つは「紙類」を分別項目に

指定している場所においても、リサイクルできる紙類が可燃に多く混入することである。それ以外のビン・カンやペットボトルが混入することはほとんどみられない。

また、不燃ごみの可燃ごみ箱への混入に関しては、特に以下のようなケースが多い。食品を生協購買部、コンビニなどで購入して教室・研究室・部室・事務室あるいは屋外などで食べる学生や教職員は多いが、多くの人は食事後に残飯や容器包装類などをいわゆる「コンビニ袋」にひとまとめに入れ、袋を閉じた上で可燃ごみ箱に入れてしまうのである。分別ができていないだけでなく、袋がしばられているため清掃業者の再分別作業も非常に行いづらく、清掃業者にとっては大きな頭痛の種となっている。

可燃と不燃の分別があまりなされない要因の一つには、現在少なくない自治体で可燃と不燃という分類がなくなって一緒に回収されており、それに慣れている人がこの分別を意識していないことも挙げられるかもしれない。分かりやすく、徹底した広報が望まれるところである。

また、「紙類」という分別項目が設定されている場所においても、可燃ごみのなかに多くのリサイクル可能な紙が混入している。この問題に関しては、「3 - 2 - 5 . 紙類」において詳しく述べる。

排出量

年度	排出量
1999 年度	6 5 0 t
2000 年度	5 6 0 t
2001 年度	4 0 0 t

3 - 2 - 2 . 不燃ごみ

処理方法

埋め立て処分

対象となるごみ

ビニール類、プラスチック類、金属類など

よく混入するごみ

紙類、割りばし、残飯など

排出量

年度	排出量
1998 年度	3 4 0 t
2000 年度	2 5 0 t
2001 年度	2 0 7 t

○組成比

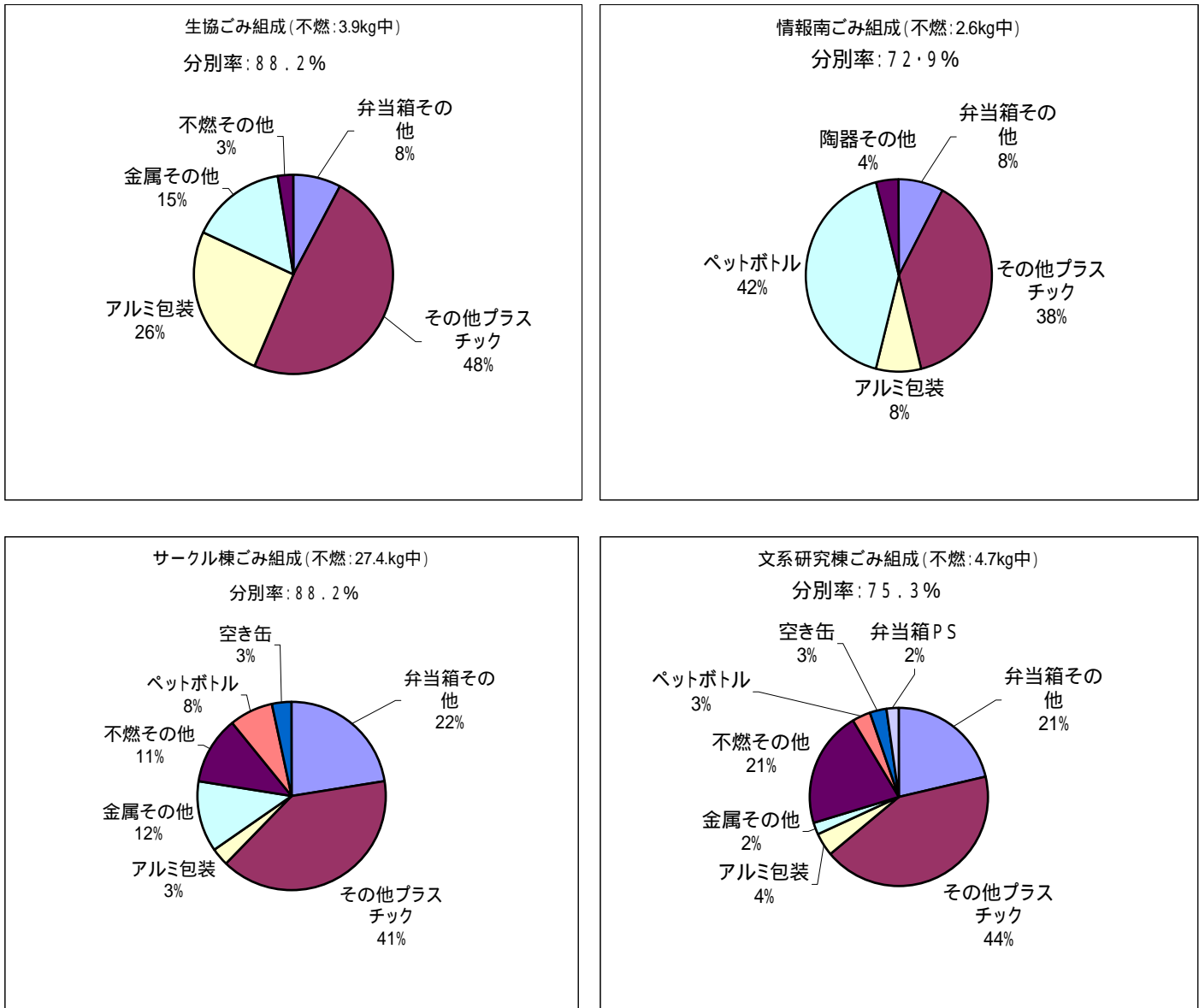


図3.2.2. 不燃ごみの組成比 (2000.10.18 - 24) 駒場廃棄物定量調査より

不燃ごみは可燃ごみについて排出量が多い項目である。また、分別も可燃ごみほどではないが、あまりできていないと言える。不燃用ごみ箱に可燃ごみが混入していることがよくあるからである。それ以外のビン・カンやペットの混入はほとんど見られない。このように、可燃と不燃の相互混入が不分別の最大の原因であり、これをいかに減らすことができるかが、分別率向上にとっては大きな課題であると言える。

なお、本郷キャンパスでは駒場でいうところの「不燃ごみ」がさらに、「プラスチック類」(ビニール・プラスチックなど)と「不燃ごみ」(金属類など)に分別されており、プラスチック類は熱源として利用されている(サーマルリサイクル)。

3 - 2 - 3 . ビン・カン

処理方法

ピンは同じくピンに、スチールカンは建材、アルミカンは自動車部品にリサイクル

対象となるごみ

ビン・カン

よく混入するごみ

ほとんどない

排出量

年度	排出量
1999 年度	52 万本
2000 年度	58 万本
2001 年度	43 万本

分別率

分別率は非常に高く、ビン・カンごみ箱に他項目が混入することはほとんどなく、また他項目のごみ箱にビン・カンが混入することもあまり見られない。ビン・カンの分別はほぼすべての構成員に認知されているようである。多くのビン・カンごみ箱は丸い穴の開いたフタがつけられており、物理的にも心理的にも他項目を入れにくくなっている。このことも分別率向上に貢献しているであろう。

なお、一部の場所（5 分別の場所）ではビンとカンのそれぞれについて別のごみ箱が用意されており、両者を分別することになっているが、現在利用しているリサイクル業者にとってはこの分別はあえて必要ないようである。

3 - 2 - 4 . ペットボトル

処理方法

洗浄されているものは再生ペット商品にリサイクル。未洗浄のものは埋め立て処分

対象となるごみ

ペットボトル

よく混入するごみ

特になし

排出量

データなし

分別率

分別率は概ね高く、ペットボトルごみ箱への他項目の混入も、他項目のごみ箱へのペットの混入もそれほど見られない。なお、ふたは不燃ごみに捨てることになっている。

ペットボトル回収に関する大きな問題点は、現状では回収されたペットの一部分しかリサイク

ルに回っていないことである。リサイクル工程にのるためには捨てる段階で洗浄済みであることが必要なのだが（糖分が容器についたまま乾燥してしまうと良質な再生原料にならない）駒場から排出されるペットボトルのほとんどは洗浄がなされていない。従って、現状ではこれらのペットボトルはリサイクル工程で取り除かれてしまっているのである。この基準に照らすと、リサイクルされているのは生協の店頭で回収されたもの（洗浄済みのものが多い）や、あるいは洗浄を行っている一部の研究室から排出されたものなどに限られ、一般のごみ箱で回収されたものはほとんどがリサイクルされていないのではないと思われる。大部分がリサイクルされていないため、現状ではペットボトルの分別は大きな効果をあげているとは言えないであろう。洗浄済みの割合を増やすための方策の導入や、あるいは洗浄されていないものでもリサイクルできるようなリサイクルルートの探索がリサイクル率の向上にとっては必要であろう。

3 - 2 - 5 . 紙類

処理方法

リサイクル可能なものは再生紙、新聞、雑誌、トイレットペーパーなどへ。不可能なものは焼却処理

対象となるごみ

コピー用紙類、新聞、雑誌、雑紙など

よく混入するごみ

リサイクルできない紙類、ホッチキス針、クリップ、ビニールコーティングなど

排出量

データなし

分別率

現在、「紙類」という分別項目が設定されているのは、事務棟（101号館や教務課など）や研究棟（2・8・9・15・16号館など）、情報棟のプリンター前、学生会館の印刷機前など、一部の場所に限定されている（講義棟のクリーンボックスで回収されたピラなどは、現在はリサイクル業者の引き取り基準の関係で可燃ごみとなっている）。これらの場所では紙類回収用のボックスが設置されている（事務棟や研究棟では上質紙・コピー用紙・新聞雑誌の3分別）。このボックスからの回収は清掃業者が行っており、1号館中庭の倉庫に集積している。また、このボックス以外からも、たまった新聞や雑誌などを学生や教職員が直接ごみ集積倉庫まで持ち込むこともある。収集業者による倉庫からの回収は年に3～4回の頻度で適宜行われている。

紙類に関しては、次の2点が問題点として挙げられるだろう。

可燃ごみなどへの混入（他項目との分別）

リサイクル可能な紙と、不可能な紙・不純物の混合（項目内の分別）

総じて、紙ごみの発生量の多さを考えると、対策は十分であるとは言えず、広報や回収方法の工夫による改善の余地は大きいと思われる。

可燃ごみのところでも述べたように、可燃ごみ用ごみ箱（あるいは不燃用）の中には多くの（リサイクルできる）紙類が混入している（調査結果）。従って、分別率の向上により、かなりの量の

紙類をリサイクルできる可能性があると言える。このためには広報や表示を工夫することが有効であろうが、特に事務棟や研究棟に関しては、次のような根本的原因も指摘されている。一般的に、業務や研究に係る書類などは、あまり他人に見られたいとは思わないものである。従って、その可能性のある回収ボックスに入れるのは抵抗があり、そのため可燃ごみとして捨てられることが多くなるというのである。この場合、回収ボックスに入れられたものが人目につかないようにするなどの工夫が有効であろう。また、これらの建物では機密度の高い書類など、シュレッダーにかけられるものも多い。現在、これらのシュレッダーくずは可燃ごみとして処理されているが、本郷キャンパスではこのシュレッダーくずもリサイクルされている。

一方、紙類として分別されたものの中にリサイクルできない紙や不純物が混入していることがある。現在のリサイクル業者の基準では、例えばビニールコーティングされた紙や新聞広告に使用されているような紙は引き取ってもらえない。また、ホッチキス針やクリップが混入していることも多い。当然これらはリサイクルされることはできない。こういったリサイクル不可能な紙や不純物などは本来ならば、学生・教職員が捨てる際に取り除かれるべきなのであるが、現在は基準が構成員にほとんど伝わっていないということもあって、上述のような状態になっている。また、事務棟や研究棟では上質紙、コピー用紙、新聞雑誌の3分別を行っているが、上質紙とコピー用紙の区別などは一般の人にはほぼ不可能であろう（本郷キャンパスではコピー用紙類、新聞、雑誌・雑紙に3分別している）。

4 - 3 . 場所ごとの特徴

4 - 3 - 1 . 講義棟 (1・5・7・11・12・13 号館)

用途・特徴	<ul style="list-style-type: none"> ・主に前期課程の授業用の教室が多数存在 ・人の流動性が極めて高く、定着している人はいない ・昼休みなどに教室内で食事をする学生が多い ・教室の机にはほぼ毎日ビラが撒かれる ・5・7号館は放課後サークル活動に使用
分別項目	<ul style="list-style-type: none"> ・可燃・不燃・ピンカン・ペットボトルの4種類 ・教室内にビラやプリント回収用の「クリーンボックス」
ごみ箱の状況	<ul style="list-style-type: none"> ・可燃・不燃・ピンカン・ペットボトル用は廊下に設置（ポリバケツ型） ・分別項目にあわせごみ箱は4つセットで設置されている（分別が行いやすいよう） ・設置場所は多い ・分別表示はしっかり張られている ・クリーンボックスはほぼすべての教室にあるが、現在はあまり利用されていない
ごみの特徴	<ul style="list-style-type: none"> ・ピンカン、ペットボトルや容器・包装類など飲食物関係が多い ・ほぼ毎日撒かれる大量のビラ（可燃ごみとして処理）
回収者	<ul style="list-style-type: none"> ・清掃業者がほぼすべてのごみの回収を担当（ビラの一部を学生自治会が回収）
回収頻度	<ul style="list-style-type: none"> ・可燃・不燃・ピンカン・ペットボトルは午前1回、午後1回
ごみ集積先	<ul style="list-style-type: none"> ・可燃・不燃・ピンカン：1・7・11・12・13号館は1号館裏、5号館は5号館裏集積場 ・ペットボトル：9号館横集積場
分別・散乱状況	<ul style="list-style-type: none"> ・分別率は低い（特に可燃と不燃の一方が他方のごみ箱に混入することが多い） ・ごみの散乱も多い（ビラなどの紙類や食品容器包装類など）

○問題点

他の号館との一番の違いは、前期課程の学生数が圧倒的に多いということである。そして、その特徴によって、さまざまな問題が起こっていると考えられる。

第一に、ごみの分別の悪さがあげられる。特に、可燃・不燃の分別率が悪い。主な理由は、学生（特に前期課程）の分別意識・知識の低さである。実際に、学生数が最も多いと思われる夏学期の初めが、一年間で最も分別の悪さが目立つときでもある。

また、分別する以前に教室内で食べた食品の容器包装類を、机の中などに放置してしまっている学生も少なくない。清掃業者の方が教室内にポスターを貼ったときには、一応改善の傾向が見られたそうだが、ごみの放置・ポイ捨てはなくなっていない。

サークルなどにより、ほぼ毎日大量に撒かれるビラの散乱もまた問題である。教室内に、ビラ

やレジユメ回収用のクリーンボックスとよばれる木箱が設置されているが、あまり利用されていないと言える。ビラの散乱は講義棟だけで見られる特有の問題である。

4 - 3 - 2 . 体育館・サークル棟 (1 体・2 体・トレ体・学館・新学館・キャンブラ)

用途・特徴	(双方とも)	・主な利用者は学生
	(サークル棟)	・サークルの部室、会議室、音楽練習室などがあり、サークル活動の拠点 ・ロビーは人の流動が激しい、部室は反対
	(体育館)	・授業に使われるほか、サークルの練習場所としても用いられている ・流動性は比較的高い
分別項目	(サークル棟)	・可燃・不燃・ビン・カン・ペットボトルの5分別 ・学生会館では印刷機付近で古紙も回収
	(体育館)	・可燃・不燃・ビンカン・ペットボトルの4分別
ごみ箱の状況	(サークル棟)	・ロビー・廊下などは金属製の新型ごみ箱と従来のポリバケツ型 ・新型は5分別に合わせてセットで置かれている ・従来型もほぼセット化されている ・部室内に自前のごみ箱を置いているサークルも多い ・学生会館の印刷機付近には古紙の回収ボックス
	(体育館)	・ポリバケツ型のものが4つセットで置かれている
	(双方とも)	・分別表示は張られている
ごみの特徴	(双方とも)	・ビンカン、ペットボトルや容器・包装類など飲食物関係が多い ・粗大ごみやサークル活動に伴う特殊なごみが比較的多い
	(サークル棟)	・学生会館の印刷機周辺では大量の紙
回収者		・廊下など公共スペースのごみ箱・回収箱は清掃業者 ・部室からのごみはサークルがごみ倉庫まで運ぶか、公共ごみ箱に移すか ・粗大ごみなどはサークルがごみ倉庫に運ぶ
回収頻度		・清掃業者は1~2回/日 ・サークルが捨てるのは適宜
ごみ集積先		・可燃、不燃、ビンカン、ペットボトルは9号館横 ・古紙は1号館中庭 ・粗大ごみなどは正式には1号館中庭だが、9号横に捨てられることが多い
分別・散乱状況	(双方とも)	・分別率は低い
	(サークル棟)	・ロビーなどへのごみの放置が多い ・周辺にごみが多く散乱している

○問題点

講義棟と同様に、学生が食事をとることの多いサークル棟ロビーではそのごみを放置していく学生が多い。また、サークル棟の周辺では容器包装類や立て看板用木材などのごみの散乱が目立っている。

また、サークル棟からは、粗大ごみや特殊ごみなど普通のごみ箱には捨てられないごみが出ることが多い。正式には、これらのごみは1号館の中庭にある倉庫に捨てなければならないのであるが、多くの学生は9号館横のごみ倉庫周辺に捨ててしまう。粗大ごみなどは年に3, 4回ある環境整備に合わせて一度に廃棄するのが望ましいが、学生に対する広報が不足しているため、認知度が低いようだ。

4 - 3 - 3 . 図書館・情報棟

用途・特徴	(双方とも)	・利用者は学生が多い ・人の流動性は比較的高い ・管理をする職員が建物内にいる ・飲食禁止
分別項目	(図書館)	・入り口付近は可燃・不燃・ビン・カン・ペットボトルの5分別 ・閲覧室にはごみ箱がない
	(情報棟)	・可燃・不燃・ビンカン・ペットボトルの4分別 ・プリンター横で紙の回収
ごみ箱の状況	(図書館)	・新型ごみ箱が入り口に(5個セット) ・館内にごみ箱はない
	(情報棟)	・各階の廊下に4分別のポリバケツ型ごみ箱セット ・プリンター横に紙回収ボックス
ごみの特徴	(双方とも)	・紙類のごみが多い
回収者	(双方とも)	・清掃業者が担当
回収頻度	(双方とも)	・1回/日
ごみ集積先	(双方とも)	・可燃・不燃・ビンカンは1号館北 ・ペットボトルは9号館
分別・散乱状況	(双方とも)	・分別は比較的良好 ・散乱は特に見られない

4 - 3 - 4 . 研究棟 (2 ・ 8 ・ 9 ・ 1 0 ・ 1 4 ・ 数理 ・ 身体運動)

用途・特徴	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教官の研究室 (と後期課程の授業) ・ 人の流動性は低い
分別項目	可燃・不燃・ビン・カン・ペットボトル・古紙の6分別 古紙の中で、新聞雑誌・コピー用紙・上質紙の3分別
排出されるごみの特徴	<ul style="list-style-type: none"> ・ 研究室が多いことから用紙、新聞、雑誌などの排出が多い
回収者	<ul style="list-style-type: none"> ・ ごみ箱からは清掃業者が回収
分別・散乱状況	<ul style="list-style-type: none"> ・ 分別は良好 ・ 散乱は見られない

4 - 3 - 5 . 事務棟 (教務課 ・ 学生課 ・ 1 0 1 号館)

用途・特徴	<ul style="list-style-type: none"> ・ 職員が業務を行う ・ 人の流動性は低い ・ 学生が出入りは少ない
分別項目	可燃・不燃・ビン・カン・ペットボトル・古紙の6分別 古紙の中で、新聞雑誌・コピー用紙・上質紙の3分別
ごみ箱の状況	<ul style="list-style-type: none"> ・ 新型ごみ箱がセット化されて廊下などに設置 ・ 古紙は3段のリサイクルボックスで回収 ・ 分別表示はしっかり張られている
排出されるごみの特徴	<ul style="list-style-type: none"> ・ 業務の関係上、紙類の排出割合が高い ・ シュレッダーくずも相当量出ている
回収者	<ul style="list-style-type: none"> ・ オーチューあるいは職員
回収頻度	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1 回/日程度
ごみ集積先	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教務課・101号館は1号館裏 ・ 学生課は9号裏
分別・散乱状況	<ul style="list-style-type: none"> ・ 分別は比較的良好 ・ 散乱は見られない

5 . 組織体制

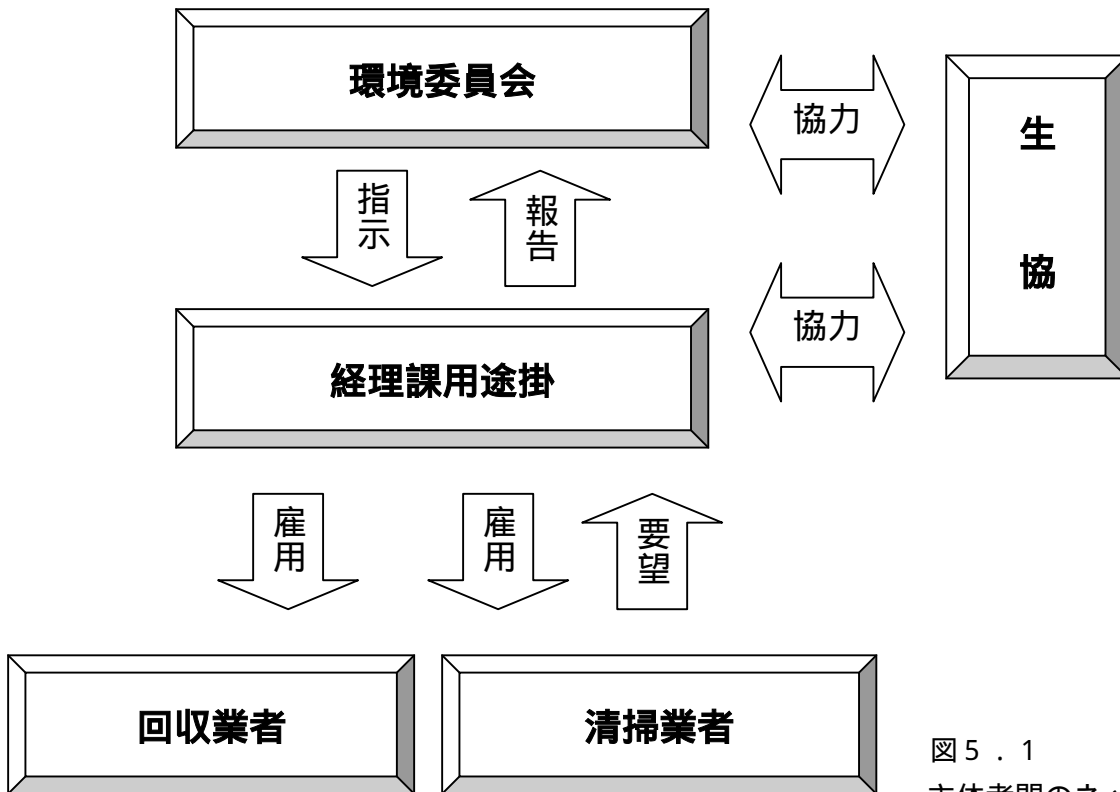


図5.1
主体者間のネットワーク

駒場キャンパスの廃棄物処理に関しては、基本的に「経理課用途掛」が意志決定・実務を担っている。そして、事務系とは異なる仕組みの中にある「環境委員会」が、何らかの問題が起きたときのような、重要事項についての意思決定を行っている。

「経理課用途掛」は、「環境委員会」の決定に基づき、業者との接触やごみ箱の配置といった実務的な役割を果たす立場にあるが、通常時の基本的な意思決定は自身で行っている。また、計画や報告を目黒区に提出する役割も担っている。

「生協」は「学部」とは独自に意志決定を行っているが、廃棄物に関しては特にその施策に協力するという関係が成立している。

「学生」はそうのように決められた廃棄物処理制度の中で「排出者」としての位置を占めている最大数の主体である。しかし、現行の制度の上では、学生が意志決定に加わることはない。

ただし、これらの主体は、国の法律や、目黒区の条例によって拘束されている。また、直接の排出先である「中間処理施設」の分別基準にも厳しい拘束を受けている。基準に適合しない廃棄物には学部が注意が来て（度々注意を受けているそうだが）あまりにもひどい場合は、受け取りの拒否に至ることもある。

付録 各集積所に集まるごみの出所

集積場所	種類	ごみの出所
9号館横	可燃	体育館、新旧学館、キャンブラ、8・9号館、 学生課
	不燃	体育館、新旧学館、キャンブラ、8・9号館、 学生課
	ビン・カン	体育館、新旧学館、キャンブラ、8・9号館、 学生課
	ペット	15・16号館以外
1号館北	可燃	講義棟（5号館除く）、情報南北棟、図書館、教務課、 10号館、掲示板前広場、新館前
	不燃	講義棟（5号館除く）、情報南北棟、図書館、教務課、 10号館、掲示板前広場、新館前
	ビン・カン	講義棟（5号館除く）、情報南北棟、図書館、教務課、 10号館、掲示板前広場、新館前
2号館横	可燃	保健センター、102、2、14号館、グランド使用サークル
	不燃	保健センター、102、2、14号館、グランド使用サークル
	ビン・カン	保健センター、102、2、14号館、グランド使用サークル
15号館横	可燃	15、16号館
	不燃	15、16号館
	ビン・カン	15、16号館
	ペット	15、16号館
	その他	ダンボール、発泡スチロール
数理棟横	可燃	数理、寮、柏蔭舎、時に教務課、近所の住民
	不燃	数理、寮、柏蔭舎、時に教務課、近所の住民
	ビン・カン	禁止したが、入れられる。
5号館横	可燃	5、6、3号館、グランド使用サークル
	不燃	5、6、3号館、グランド使用サークル
体育研横	可燃	体育研
	不燃	体育研
1号館紙倉庫	紙	文理研究棟、学館、事務棟、図書館、情報棟、

ビン・カンは最終的に9号館横と1号館北に集められて、業者が持っていく。

付録 場所ごとのごみ回収頻度

清掃業者の回収頻度

頻度	場所
2回/日	講義棟、学館、数理
1回/日	キャンプラ、図書館、情報南北棟、新学館、8号館、体育館、10号館 掲示板前広場、新館前
3回/週	2、14、15
2回/週	3、6、9、体育研、105
その他	
やっていない	101、102、16（16は紙のみ）、保健センター、柏蔭舎

休業中

頻度	場所
1回/日	キャンプラ、図書館、情報南北棟、新学館、8号館、体育館、10号、 掲示番前広場、新館前、学館、数理
2回/週	3、6、9、体育研、105、15、16、2、14
やらない	講義棟（臨時でやるときは別契約）

清掃業者以外の回収者

- 101号館 . . . 学生課職員
- 102号館 . . . 経理課職員
- 16号館 . . . 教授、学生（後期課程、院生）
- 保健センター . . . 保健センター職員
- 柏蔭舎 . . . 学生（茶道部など）
- 生協のごみ箱 . . . 生協職員、自販機メーカー

参考資料：

環境三四郎・駒場環境調査'99・1999

環境三四郎・事例研究 駒場キャンパスにおける廃棄物問題について・2000

駒場環境ネットワーク準備会 廃棄物WG・駒場廃棄物定量調査（RoDiK）・2000